



# 第37回 伊方集会に参加して

2023年10月22日(日)、午前10時から愛媛県佐田岬にある四国電力伊方原子力発電所のゲート前で行われた「伊方集会」に参加しました。

「伊方集会」は1986年4月のチェルノブイリ原発事故の後、「危険な原発事故を伊方で起こしてはならない」と危惧する人々によって原発廃炉を求めて始められました。毎年開催され、今回でなんと37回目だそうです。

この息の長い抗議行動の中、伊方原発は1号機、2号機は稼働を続け、3号機は1994年に建設されました。抗議を続ける中で、2011年3月11日にはあの福島原発事故が起こり、一時は国内すべての原発が停止されました。その後伊方原発は1号機(2016年)、2号機(2018年)の廃炉が決定され、3号機は様々なトラブルや対策工事で停止と再稼働を繰り返しています。

「37年抗議の声を上げ続けても、福島原発の過酷事故が起こっても、原発は止まらないのか。」と悲しい気持ちにもなりますが、ゲート前で想いを同じくする人たちの声を伺っていると、あきらめてはならないと前向きな気持ちになり、元気を貰えます。

ゲート前に集まる人たちの顔ぶれは、長年の間に世代交代を繰り返しつつも、「原発を止める」という先人の想いはしっかりと引き継がれています。残された3号機の廃炉を目指してゲート前で「原発は止められる」という想いで、それぞれがスピーチしたり、歌で想いを伝えたりしました。

秋晴れの青空と鏡のように穏やかな瀬戸内海を眺めながら「原発さえ無ければ」と強く思います。

「伊方集会」では、毎回四国電力の社長宛に要請文を提出します。四国や九州の各市民団体等からの要請文が読み上げられ、社長代理の広報の方に手渡されます。制服を着た警備の方に両脇を守られながら要請を聞いていた代理の方は黙って要請文を受け取り、逃げるように立ち去って行きます。

私たちは広報の方に、随分と怖がられてしまっているようです。対立しないで対話するのは本当に難しいですね。

原発事業が経済的に破綻しているということは、今では、政府の人も企業側も十分承知のはずなのに「やめられない、止められない」。まるで「かっぱえびせん」のような状態はなぜなのか？

▼秋晴れの青空と鏡のように穏やかな瀬戸内海。「原発さえ無ければ」





放射能を発生させ続ける原発を止めるためにゲート前で声を上げ、裁判で闘い、株主総会で提案を出し、電力会社や地方議会や国会に意見書、要望書、提案書、請願書、陳情書、抗議書等々…を何十年にも渡って提出し、アクションを起こし続ける人たちが日本中、世界中にいます。そして、その数は確実に増え続けていると感じます。

11時に始まった要請書の読み上げと手渡しなど、ゲート前での行動は12時くらいに終わりました。その後は場所を移動し、コロナ禍で中止していた交流会が久しぶりに佐田岬半島ミュージアムの会議室で行われました。「初めまして」の方も多数おられて楽しく有意義な時間をすごせました。時間は瞬く間に過ぎ、午後3時に解散となり、帰路に着きました。

主催された「原発さよなら四国ネットワーク」や共催団体、協賛団体の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。

全ての原発を廃炉にするまで、「私たちは止まらない!」

未来を考える脱原発四電株主会共同代表 内田知子



▲それぞれがスピーチしたり、歌で想いを伝えたりしました。



▲11時に始まった要請書の読み上げと手渡し。

▼ゲート前



▲交流会が久しぶりに佐田岬半島ミュージアムで行われました。